

平成 27 年度 第 1 回 JSL 研修

平成 27 年度 JSL 児童生徒教育研修会のお知らせ

東京学芸大学国際教育センターでは、今年度も、日本語を母語としない児童生徒(JSL 児童生徒)の教育に関わる方々を対象とした研修会を開催いたします。ぜひご参加ください。

第 1 回研修会について

第 1 回研修会は、「今年度の日本語学級・指導を軌道に乗せる」ために、情報を共有し、課題の解決の方法を探ることを目指します。今年度は、次の 3 つのグループを設けました。

① 初めて外国人児童生徒を担当する方のためのグループ

このグループは、「初めて JSL 児童生徒に関わる教員」を対象にしています。JSL 児童生徒 教育の基礎となる情報、理論と日本語学級担当者の役割についての講義のあと、少人数のグループでのディスカッションを行います。分科会では、経験豊かな講師を交えたディスカッションを通して、参加者が抱える課題への対応の方法を探っていきます。

② すでに外国人児童生徒の教育に携わっている方のグループ

日本語学級を担当する先生が 1 校に複数いることは少なく、相談相手がいないという話を聞きます。現在の課題を持ち寄り、一緒に考えましょう。ぜひ、研修会の場を活用してネットワークを作ってください。

③ 管理職や指導主事の先生方のグループ

外国人児童生徒教育で、こうした先生方の役割はたいへん重要です。しかしなかなか、他の学校や地域の様子を知る機会はありません。「特別の教育課程」の導入など新たな動きもあります。情報を得る場、情報交換の場としてご活用ください。

過去の研修の様子は「[こどものにほんご](#)」にてご覧いただけます。

【第 1 回研修会のご案内】

- 日 時 : 平成 27 年 5 月 9 日(土) 10:00 ~ 16:30
- 会 場 : 東京学芸大学 (小金井市貫井北町4-1-1)
- 参 加 費 : 無料

■ 申込方法: メール(c-event@u-gakugei.ac.jp)またはファクス(042-329-7722)で、東京学芸大学国際教育センター事務局宛に申込用紙をお送りください。申込用紙は([H27JSL①申込用紙.docx](#))からダウンロードできます。

■ 申込締め切り : 4月30日(木)

分科会編成の都合上、できるだけ、4月30日(木)までにお申し込みください。その後はメール、お電話でお問い合わせください。

■ お問い合わせ先:東京学芸大学国際教育センター 事務局

Tel. 042-329-7727

メール c-event@u-gakugei.ac.jp

◆ プログラム ◆

全体進行: 見世 千賀子(東京学芸大学国際教育センター)

10:00 開会挨拶 池田 榮一(東京学芸大学国際教育センター長)

10:05 はじめに 菅原 雅枝(東京学芸大学国際教育センター)

10:25 講義1 「外国人児童生徒教育の現状と課題」

吉谷 武志(東京学芸大学国際教育センター)

11:25 講義2 「学齢期の子どもの第二言語習得」

松井 智子(東京学芸大学国際教育センター)

12:25 分科会講師紹介・事務連絡

(12:30~13:30 昼食)

13:30 分科会

コーディネーター:市川 昭彦 (大泉町立 北小学校)

伊藤 敦子 (小牧市立 大城小学校)

植村 恭子 (鈴鹿市教育委員会)

小川 郁子 (前・北区立 稲付中学校)

西村 綾子（福岡市立 春吉小学校）

馬庭 奈由（世田谷区立 八幡小学校）

16:00 全体会

16:30 閉会

第36回 海外子女教育セミナー

第36回 海外子女教育セミナー

「変わりゆく海外子女教育と派遣教員の役割」

日時:平成27年5月23日(土) 10:00～16:30

会場:東京学芸大学 S 講義棟 2階 203 教室

対象:これから在外教育施設に派遣を希望する教員、在外教育施設派遣教員登録者、

及び海外子女教育に関心をもつ方

主催:東京学芸大学国際教育センター

■■■プログラム■■■

9:30 開場、受付開始

10:00～10:10 開会の挨拶 池田 榮一(東京学芸大学国際教育センター長)

10:10～10:50 講演「海外子女教育の現状と課題」

小林 万里子(文部科学省初等中等教育局国際教育課 課長)

11:00～11:50 講義「在外教育施設における教育課題と派遣教員に求められるもの」

見世 千賀子(東京学芸大学国際教育センター 准教授)

11:50～13:00 昼食

13:00～16:30 派遣教員による海外での実践報告・パネルトーク「海外での生活をめぐって」

野村 知弘(茨城大学教育学部附属小学校教諭:前上海日本人学校虹橋校)
松林 淑子(滋賀県愛知郡愛荘町立愛知中学校教諭:前デュッセルドルフ日本人学校)
塚越 晶子(群馬県立盲学校教諭:前クアラルンプール日本人学校)
梶田 邦夫(前ロサンゼルス補習授業校校長・元グアム日本人学校)
滝 多賀雄(全国海外子女教育・国際理解教育研究協議会 会長)

【参加お申し込み方法】

申し込みは、氏名、ご所属、返信用のメールアドレス、もしくは FAX 番号を明記の上、下記宛にメールか FAX にてお申し込みください。

件名「海外子女教育セミナー申し込み」とし、本文に氏名・所属をご記入ください。

- * ご質問、ご不明な点につきましても、下記までお問い合わせください。
- * 詳細は、随時ホームページに掲載します。

【お問い合わせ先】

東京学芸大学国際教育センター事務室

Email [c - event@u-gakugei.ac.jp](mailto:c-event@u-gakugei.ac.jp) FAX 042-329-7722

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1 TEL 042-329-7727

国際教育センターURL: <http://crie.u-gakugei.ac.jp/>

平成 27 年度 第 2 回 JSL 研修

平成 27 年度 東京学芸大学国際教育センター

第2回 JSL 児童生徒教育研修会のご案内

第2回研修会は、長く JSL 児童生徒教育に携わってきた講師と共に「実際に作ってみる・やってみる」ことを中心とした研修です。

頭で理解したことを実際に相談しながらやってみることで、現場の状況に合わせて指導できる力を伸ばしていくことを目指します。

【H26 年度 第 2 回研修会参加者の声から】

今年度は「特別の教育課程による日本語指導」の導入を受け、指導計画の立て方や校内・地域内の体制づくりに関するグループも設けました。

グループは、参加される皆様の興味関心や JSL 児童生徒教育の経験、対象となる子どもの年齢などをもとに編成しています。できる限りご希望に沿ったグループ編成をしたいと思います。人数によっては分科会ができなかったり、学校種や経験が多様な方が集まるグループになったりすることもあります。どうぞご了承ください。

【第2回研修会のご案内】

- 日 時 : 平成 27 年 6 月 27 日(土) 10:00 ~ 16:30
- 会 場 : 東京学芸大学 (小金井市貫井北町4-1-1)
- 場 所 : C204教室 *これまでの研修会と教室が違いますのでご注意ください。
- 参 加 費: 無料
- 申込方法: メール(c-event@u-gakugei.ac.jp)またはファクス(042-329-7722)で、東京学芸大学国際教育センター事務室宛に申込用紙をお送りください。申込用紙はこちら([H27JSL2 申込用紙.docx](#))からもダウンロードできます。
- 申込締め切り : 6 月 11 日(木)

分科会編成の都合上、できるだけ、6 月 11 日(木)までにお申し込みください。その後はメール、お電話でお問い合わせください。

- お問い合わせ先:東京学芸大学国際教育センター 事務室

Tel. 042-329-7727

メール c-event@u-gakugei.ac.jp

☆ プログラム等はホームページで順次お知らせしてまいります。

◆ プログラム ◆

全体進行: 見世 千賀子(東京学芸大学国際教育センター)

10:00 開会挨拶 池田 榮一(東京学芸大学国際教育センター長)

10:05 「日本語での学習」を支えるために 菅原 雅枝(東京学芸大学国際教育センター)

(休憩・移動:10:50~11:00)

11:00 分科会

コーディネーター:市川 昭彦 (大泉町立 北小学校)

伊藤 敦子（小牧市立 大城小学校）

今澤 悌（甲府市立 新田小学校）

大菅 佐妃子（京都市教育委員会）

小川 郁子（前・北区立 稲付中学校）

西村 綾子（福岡市立 春吉小学校）

濱村 久美（大田区立 蒲田小学校）

（分科会ごとに昼食）

15:30 全体会

16:30 閉会

第 16 回外国人児童生徒教育フォーラム

外国人児童生徒支援におけるスクールソーシャルワークの役割

～学校・地域・家庭で子どもたちを支えるために～（仮）

今年度の外国人児童生徒教育フォーラムでは「スクールソーシャルワーク」を取り上げます。

近年、子どもたちが抱える課題は複雑化しており、学校だけでは十分に対応できない事案も多く見られるようになってきました。こうした状況の中、家庭や地域など子どもたちが置かれている環境に直接働きかけて支援を行うスクールソーシャルワークが注目されています。

外国人児童生徒への支援では、早くから学校・家庭・地域の連携の重要性が指摘されており、スクールソーシャルワーカーには大きな期待が寄せられています。しかしその一方で、言語文化の異なる子どもや家庭であることに由来するむずかしさも容易に想像されます。このフォーラムでは、スクールソーシャルワークの意義や動向について学ぶとともに、言語文化背景が異なる子どもや家庭と学校や地域をつなぐスクールソーシャルワークに期待されることや課題について考えてみたいと思います。

外国人児童生徒の支援に関わる皆様、また、スクールソーシャルワークに関心をお持ちの皆様のご参加、お待ちしております。

日時:2015年10月3日(土) 10:00～16:30

場所:中野サンプラザ 7階研修室 10

参加費: 無料

定員: 60名

締切: 2015年9月24日(木)

お申し込み: 東京学芸大学国際教育センター

メール c-event@u-gakugei.ac.jp Fax.042-329-7722

お問い合わせ: 東京学芸大学国際教育センター教務室 042-329-7717 事務室 042-329-7727

外国人児童生徒支援におけるスクールソーシャルワークの役割

～学校・地域・家庭で子どもたちを支えるために～

日時: 2015年10月3日(土)10:00～16:30

場所: 中野サンプラザ 7階研修室 10

◆ プログラム ◆

10:00 開会 総合司会: 松井 智子(東京学芸大学国際教育センター)

10:00～10:05 開会挨拶 池田 榮一(東京学芸大学国際教育センター長)

10:05～10:15 趣旨説明 菅原 雅枝(東京学芸大学国際教育センター)

10:15～11:25 講義: 多文化社会のスクールソーシャルワーク

馬場 幸子(東京学芸大学教育学部)

11:30～12:10 報告: 福岡市におけるスクールソーシャルワーク

梶谷 優子(福岡市スクールソーシャルワーカー)

(12:10～13:15 休憩)

13:15～13:20 午後の部の進め方について

13:20～15:15

パネルディスカッション:

外国人児童生徒支援とスクールソーシャルワーク | 学校・地域・家庭をつなぐ取り組み

① 横浜市上飯田地区 田中 秀仁(横浜市立飯田北いちょう小学校 校長)

② 川崎市桜本地区 原 千代子(川崎ふれあい館 館長)

Ⅰ パネルディスカッション

パネリスト:

馬場 幸子(東京学芸大学教育学部)

梶谷 優子(福岡市スクールソーシャルワーカー)

田中 秀仁(横浜市立飯田北いちょう小学校 校長)

原 千代子(川崎ふれあい館 館長)

15:25~16:25 全体討議

16:30 閉会

カテゴリ:[イベント](#)

平成 27 年度 第3回 JSL 研修

みんなで共有しようーよりよい実践に向けてー

東京学芸大学国際教育センターでは今年度 2 回の JSL 研修を実施いたしました。その中で繰り返し言及されていたのが、日本国内にいる JSL 児童生徒の多様さと、子どもたちの実態に合わせて授業を組み立てる重要性です。JSL 児童生徒教育で大切なのは、知識を基に実際に授業を作り実践してみること、そしてそれを振り返ってみることだと考えます。

そこで、第 3 回 JSL 研修会は、参加者が持ち寄った実践、指導案、教材をもとに、講師を交えてディスカッションをする形の研修を企画しました。お互いの実践から良いところ、取り入れられるところを見つけ、さらにより実践を目指しましょう。また、体制づくりについて深く議論したい方や、これまで外国人児童生徒教育の研修に参加する機会がなかった方のための分科会も開催いたします。

皆様のご参加、お待ちしております。

平成 27 年度 第 3 回 JSL 研修会

日時 : 平成 27 年 12 月 5 日(土) 10:00 ~ 16:30

場所 : 東京学芸大学 S 講義棟(全体会会場 S203)

参加費: 無料

内容：全体会 校内の体制と取り出し授業についての報告(日本語指導が必要な子どもたちへの学校全体での支援体制の構築と、その上での取り出し指導の実践例をご紹介します)

分科会 参加者による報告・ディスカッション・講師からのアドバイス

☆ 新たに「これまで研修会に参加する機会のなかった方」のグループも設けました。

定員：30名

お問い合わせ：東京学芸大学国際教育センター教務室 042-329-7717

第3回 JSL 研修会 お申し込み方法

第3回研修会は、当日ご紹介いただく内容によってグループの編成を行いますので申込用紙([H27JSL③申し込みフォーム.docx](#))および「報告の概要」をご記入の上、メールまたは Fax. で東京学芸大学国際教育センター事務室にお申し込みください。

メール：c-event@u-gakugei.ac.jp Fax.:042-329-7722

申し込みの締め切りは 11月23日(月)とさせていただきます。

申込用紙：[H27JSL③申し込みフォーム.docx](#)

なお、共有いただくお話の内容によって分科会を編成いたしますので、「概要」をご記入いただいていないお申し込みはお受けできません。あらかじめご了承ください。

「非漢字圏の子どもへの作文指導の方法を教えてください」では、講師も適切なアドバイスをすることはできません。子どもの様子や使った教材、授業の進め方などを分科会で共有し、一緒に考え、学んでいきましょう。これが第3回研修会の趣旨です。

授業づくりの分科会には「今回初めて参加したい」という方、現在実践の場をお持ちでない方もご参加いただけます。過去の授業事例や教材、子ども像を想定して作成した指導案のほか、ご自身が見た JSL 児童生徒に対する授業のご報告でも構いません。「どのような子どもを対象にした授業で、どのような工夫がみられたか。自分だったらどんな展開にしたか」などをお話してください。

【当日までの流れ】

お申し込み時にいただいた「報告の概要」は、分科会ごとにまとめ、当日の資料といたします。

それ以外の資料等につきましては、お申し込み受付後にご案内いたします。確実に連絡が可能なメールアドレスまたはファックス番号をお忘れなくご記入ください。

いろいろな「報告」をお待ちしていますプログラム

国際教育センター・平成 27 年度第3回 JSL 研修

みんなで共有しよう よりよい実践に向けて

日時 :2015 年 12 月 5 日(土)

10:00~16:30

場所 :東京学芸大学 S 講義棟

◆ プログラム ◆

- 10:00 開会 全体進行: 見世千賀子(東京学芸大学国際教育センター)
- 10:00~10:05 開会挨拶 池田 榮一(東京学芸大学国際教育センター長)
- 10:05~10:15 趣旨説明 菅原 雅枝(東京学芸大学国際教育センター)
- 10:15~11:50 報告:校内体制と取り出し指導「まるごと!大城小学校」

☆ 子どもたちが学校で「その子らしく」「のびのびと」過ごすには、日本語教室での指導だけでなく、学校全体の支援体制を作っていくことが必要です。今回は、小牧市立大城小学校の支援体制と取り出しによる指導の両方を一度にうかがう機会を設けました。

報告: 伊藤 敦子(小牧市立 大城小学校)

- ① 小牧市立大城小学校の支援体制
- ② 授業実践報告

11:50~12:00 分科会講師紹介

12:00~13:00 昼食

13:00~16:00 分科会

講師:市川 昭彦(大泉町立北小学校)、伊藤 敦子(小牧市立大城小学校)

今澤 悌(甲府市 新田小学校)、大菅 佐妃子(京都市教育委員会)

小川 郁子(都立高校 JSL 講師・前東京都公立中学校日本語学級教員)

16:10～16:30 全体会

16:30 閉会

学校のセクシュアル・マイノリティ教育・支援研修

2015年 国際教育センター・LGBT教育研修会のご案内

このたび、国際教育センターでは「学校のセクシュアル・マイノリティ教育・支援研修」を下記の要領で開催します。

参加希望者は、要領をご覧の上、記載されている宛先まで、電子メールでお申し込み下さい。

趣 旨

近年、広く社会一般だけではなく、学校におけるセクシュアル・マイノリティ(LGBT)に属する児童、生徒、教員の存在が注目されています。特に、LGBTに属する児童生徒が学校に在籍しているにもかかわらず、教師や保護者はその対応について、十分な知識や経験が無いために、その対応に困り、戸惑っているのが現実です。

本研修は、主として学校の教師や教育委員会関係者等を主たる対象に、セクシュアル・マイノリティ(LGBT)の児童生徒、その保護者への学校における支援、教育、受け入れについて、基礎知識の習得、出会いの体験、学校の環境作りなどを学ぶ機会を提供し、セクシュアル・マイノリティ(LGBT)に属する児童生徒が差別やいじめの対象とならないような学校作りに資することをめざします。

参加を希望される方(教師、教育委員会関係者)は、下記の要領でお申し込み下さい。

日 時: 2015年12月19日(土) 10:00～16:30

場 所: 東京学芸大学合同棟(国際教育センター)1階 大教室

参加費: 無料

定 員: 40名

申込先: 東京学芸大学国際教育センター「LGBT研修」

メール c-event@u-gakugei.ac.jp (Fax:042 329 7722)

記載内容

①氏名

②所属(学校、幼稚園、教育委員会、等の名称)

③連絡先のメールアドレス(申し込み受領確認を返送します)

締切: 2015年12月9日(水)(定員になり次第締め切らせていただきます)

問合せ: 東京学芸大学国際教育センター

教務室 042-329-7717、または 事務室 042-329-7727

第7回 多文化共生フォーラム

多文化児童のことばと文化の獲得

—家庭での母語コミュニケーションの重要性とその支援について考えよう—

東京学芸大学国際教育センター 主催

乳幼児期の母子コミュニケーションは、言葉の発達のみならず、情動や社会的スキルの発達、つまり自分や相手の心を理解する力と自分の気持ちを表現したりコントロールしたりする力の発達のために不可欠です。反対に、幼児期に母語でのコミュニケーションの経験が十分ないと、子どもは就学後も感情をコントロールすることや集中することが難しくなり、学習の構えがうまく育たないことがあります。日本在住の多文化児童の育つ環境にも、そのようなハンディに陥る要因が少なからずあるようです。

近年、日本在住の多文化児童の多くが、日本生まれ、あるいは生後間もなく来日しています。親の母語は日本語ではないため、この子どもたちは生まれるとすぐに多言語・多文化環境に置かれることとなります。問題となるのは、家庭での母語コミュニケーションが何らかの理由で質的・量的に十分ではなく、子どもの母語の発達が遅れる、あるいはストップし、親子のコミュニケーションができなくなる家庭が少なからずあることです。家庭でのコミュニケーション不全は、子どもの問題行動の一因となります。

そこで今回のフォーラムでは、多文化児童の家庭での母語コミュニケーションに焦点をあて、その現状と課題、そして問題の解決に向けて、必要な支援の在り方を探りたいと思います。ご関心をお持ちの方々にご参加いただけましたら幸いです。

■日時: 2016年1月30日(土)13:00~17:00

■場所: 東京学芸大学 S講義棟3階 303教室(小金井市貫井北町4-1-1)

参加費: 無料

定員: 70名

申し込み締め切り: 1月21日

■お申し込み・お問い合わせ先:

東京学芸大学国際教育センター 教務室

TEL: 042-329-7717 FAX: 042-329-7722

メール : c-event@u-gakugei.ac.jp

■URL: <http://crie.u-gakugei.ac.jp/>

◆ プログラム ◆

- 12:30 受付開始
- 13:00 開会
- 13:00 開会の辞 池田榮一 (東京学芸大学国際教育センター長)
- 13:05～13:15 趣旨説明 松井智子 (東京学芸大学国際教育センター・教授)
- 13:15～13:55 「母語が違う親子における絆形成の問題点」
山城ロベルト (ブリッジハートセンター東海代表理事)
- 13:55～14:35 「在日ブラジル人妊産婦のサポートシステムの構築から見えてきた生活文化」
畑下博世 (三重大学医学部看護学科・教授)
- 休憩—
- 14:45～15:45 「母子コミュニケーションの比較発達と多文化保育」
竹下秀子 (滋賀県立大学人間文化学部・教授)
- 15:45～16:10 指定討論 林安紀子 (東京学芸大学教育実践研究センター・教授)
- 16:15～16:55 パネルディスカッション
- 16:55～17:00 閉会の辞 吉谷武志 (東京学芸大学国際教育センター・教授)
- 17:00 閉会

【講演概要】

母語が違う親子における絆形成の問題点

当法人活動している浜松市が位置する東海地方には、世界的に有名な自動車産業やその下請け工場が多く、海外からの出稼ぎや企業研修などで多くの外国人が働いています。

2008年のリーマンショックや東日本大震災の後、国内の社会的環境は変化しました。多くの外国人市民は帰国し減少していますが、永住を希望する外国人市民も少なくありません。永住を希望する外国人市民は働いている地域で結婚し、子どもが生まれ、家庭を築いています。ただ、生まれた子どもは最初こそ親の言葉を聞いて育ちますが、育っていく中で、両親が共働きにより日本の幼稚園や保育園に預けられることで、日本語と接する機会が増え、また小学校にあがれば日本語を基礎とした教育を受けることとなります。その中で、次第に日本語が母国語になる子どもたちが増えてきました。また日本で生まれ育つという事は日本での生活文化しか知りません。ですが親の中には日本語が全然話せない親も少なくありません。そのような家庭環境下では親と子の間に言語や文化による溝を作ってしまう事があります。

当法人の生活支援事業において、親から「子どもが何を考え、どうしたいのかわからないし、言葉もうまく通じないので、インターネットの翻訳ソフトを使って会話している。」という相談も持ちかけられたことがあります。

当法人はそのような家庭環境で育っている子どもと、そのことに悩む親の間をつなぐことが出来ればと教室運営をスタートさせました。ポルトガル語とスペイン語の2言語ではありますが、開催を実施して今年で3年目になります。

今では教室に通わせている親からは、子どもとポルトガル語やスペイン語で会話できるといった話や、母国の文化を母語で話すことができるといったお言葉も頂くことが出来ています。

この、言語支援をただ「言葉を教える」で終わるのではなく、言葉に関わる文化も一緒に学んでいく事が必要であると考えております。

在日ブラジル人妊産婦のサポートシステムの構築から見えてきた生活文化

三重大学医学部看護学科 畑下 博世

在日ブラジル人女性の妊娠から育児期までの研究とサポートを行った結果、「身内同士での支えあいは強いが、友人や近所との日常的なつきあいはない」「過酷な労働により、不規則な生活を送る」などの日常生活の実態と健康上の課題が明らかとなり、ブラジル人母子サポートマニュアルを作成した。また、在日ブラジル人妊産婦が孤立した状況にあるという結果を踏まえ、個別支援を行いながら、社会資源を効果的に結び付ける介入研究に取り組んだ。在日ブラジル人妊産婦が必要とする社会資源を利用するには、そこにアクセスするまでに「つまづき」があり、他者による「繋ぎ」を必要としていた。我々の健康相談がその「繋ぎ」の機能を果たすことにより、関係機関とのサポートネットワークがボトムアップで構築されることを検証した。

人々の健康意識や行動は文化への適応の結果であり、健康問題は、文化の違いを考慮することが重要である。ブラジル人妊産婦が日本という国に住みながら、どのようなことをストレスとして感じ、自身の状況をどう捉えているのか、また課題についてどのように対処する傾向があるのかを深く理解することにより、より個別に適した支援が行えると考えた。そこで、妊娠・出産・育児というライフイベントを経験する

中で、「どのような心身の健康状態を体験しているのか、それらをどう解釈し、意味づけているのか、どのような対処行動を取ろうとしているのか」を在日ブラジル人妊産婦自身の考えや行動に焦点をあてながら分析した。その結果、【血縁の重要性と依存しない夫婦【労働力でありつづける逞しさ】【保健医療制度への低い満足度】【宗教によりもたらされる恵み】【ブラジル人社会で交流が完結】【両親との密接な関係】などが抽出され、日本とは異なる家族や親族の歴史的背景、夫婦のあり方や宗教が影響していることが示唆された。デカセギという境遇の中で、これらのことが言語習得にどう影響するかは課題提起になればと考える。

母子コミュニケーションの比較発達と多文化保育

滋賀県立大学人間文化学部 竹下秀子

人間特有の知性の進化にかかわって、子どもの発達とこれを支える養育システム、すなわち、母親とともに母親以外の他者がかかわる養育システムの意義への理解が深まりつつある。他方、その中核に存在するのが母親であることを認識し、尊重することの重要性もますます明らかになりつつある。

母胎は胎児の育つ場であり、臍帯を通じて栄養を得るとともに、触覚、聴覚に加えて視覚さえもが胎内の環境との相互作用によって発達していく。人間の胎児が脳発育において最も近縁のチンパンジーとも異なる特徴を示し始める胎齢 22 週頃以降に聴覚の発達が進む。胎外からの音刺激も直接摂取できるようになるといえるが、刺激の源は母親自身と母親の生活環境にある。胎児の心と身体は母親の心身とその存する環境からの刺激を糧として育つ。母語も胎児期からの母子コミュニケーションの蓄積を経てこそ獲得され、健やかに発達するといえる。

本講では、上記についての議論のほか、滋賀県内の外国人住民集住地域の保育所で育つ子どもの姿を紹介する。平日の日中は家族と過ごす時間よりも長い時間を日本語環境の保育所で育つ多言語・多文化環境の子どもたちだ。彼らの日本語習得は遅れがちであり、日本語母語児とのやりとりでトラブルになることも少なくない。しかし、同年齢の日本語母語児に比べて発話や理解が不十分な時期にあっても、子どもは自分の思いをさまざまな表現によって他者に伝えようとする。家庭で身につく母国文化特有のジェスチャーによることも多い。子どもの心身を育てる母子コミュニケーションを大切にしつつ、地域の保育所で友だちに出会うこと、信頼する保育士に寄り添われる日常を保障されることが、人間的な子育てに不可欠であることへの理解を、彼らの育ちの実情を把握することによって共有したい。合わせて、多言語・多文化環境の母子を支える保育や社会制度が、母子コミュニケーションを支援する観点から整備される必要について考えたい。

第 9 回 国際教育センターフォーラム

多文化保育における子どもの発達の可能性を考える

—より柔軟な支援を目指して—

近年、外国人の定住化傾向や国際結婚の増加にともない、日本においても文化的多様性に配慮した保育のニーズが高まっています。日常生活の中で意識する機会はありませんが、私たちの習慣、常識、コミュニケーションの仕方などの多くは、日本文化に特有なものです。私たちが考える良い保育や、適切な子

育てのイメージも例外ではありません。外国につながる子どもや保護者との関わりの中で、時として違和感や誤解、摩擦が生じてしまうのも、互いの持つこうした「当たり前」の違いに起因することが多いようです。

日本の保育文化における「当たり前」を見直し、外国につながる子どもを含めた保育のあり方を模索する時期にきています。そのためには、日本文化の枠にしばられない保育実践に目を向けることも有効でしょう。そこで本フォーラムではまず、異なる背景をもつ子どもや大人が対話を通してどのような学びを生み出していくのかに関する基本的な理解を深めます。そのうえで、主に日本語を用いた保育が行われている中華系の園での調査から見てきた子どもの発達や学びについて、特に、多文化共生を志向する子ども同士のやり取りの特徴や、ことば・数量の認識、多文化保育特有の保育課題や支援のあり方に焦点をあてて報告します。それをもとに日本の保育を捉えなおし、文化的多様性に配慮した柔軟な発達への支援のあり方について、ご来場の皆さまと一緒に探りたいと考えています。

■日時： 2016年3月5日(土)13:10～16:30

■会場： 中野サンプラザ7F研修室 10

■申し込み・お問い合わせ先： 東京学芸大学国際教育センター 教務室または、事務室まで

Tel.042-329-7717,7727 Fax 042-329-7722

メール c-event(@)u-gakugei.ac.jp ※(@)を@に置き換えてください。

定員 95名 (申し込み受付順)／申し込み締切:2016年3月2日(水)

定員に達しましたので、お申し込みは締め切らせて頂きました。

たくさんのお申込みありがとうございました。

<プログラム>

13:10 開会

13:10～13:20 開会の辞 池田榮一(東京学芸大学国際教育センター長)

13:20～13:30 趣旨説明 榊原知美(東京学芸大学国際教育センター・准教授)

13:30～14:20 「子どもが「異」を排除するとき、しないとき」

佐伯胖(田園調布学園大学・教授, 東京大学, 青山学院大学・名誉教授)

— 休憩 —

14:30～14:55 「多文化保育における幼児の自発的な共生方略」

榊原知美(東京学芸大学国際教育センター・准教授)

14:55～15:20 「多文化保育における幼児のかかわりとことば」

山名裕子(秋田大学・准教授)

15:20～15:45 「多文化保育特有の保育課題と保育者の支援のあり方」

和田美香(聖心女子専門学校・講師)

15:45～16:00 コメンテーター 白川佳子(共立女子大学・教授)

16:00～16:30 討論

16:30 閉会

[国際交流フォーラムポスター.pdf](#)

講演概要

①子どもが「異」を排除するとき、しないとき

田園調布学園大学 佐伯 胖

【概要】

幼稚園などでの子どもの遊びは、多くの場合、一緒に遊ぶ仲間が固定しているグループ(お仲間)ができ、それまで仲間に入っていなかった子どもが「入れて」といっても、「ダメよ」と言ったり、「△△をもっていない人はダメ」というような、ほとんど意味のない条件をつきつけて排除したりする。それは、子どもたちが特定の集団に所属し、集団外を排除するとともにその集団のメンバー同士で恩恵を分かち合うこと(「内集団ひいき」)で、いわば「安心社会」を構成しているのである。ところが、そのようなグループもしだいに争いが生まれ、別々の遊びを探求、別のパートナーと遊んだりするようになっていく(「信頼社会」への移行)。講演では、そのような移行のプロセスを、ヴァスデヴィ・レディの「二人称的アプローチ」の観点から考察する。つまり、子どもの自己意識の発達(「三人称的なまなざし」)のなかで自己を三人称化する(自分は「どの集団のメンバーか」でアイデンティティを保つ)ことから、自らを二人称化する(固有の意図、好み、動機をもつ、行為主体であることを受け入れる)ことにより、他者を二人称的に見て、その未知性を怖れるのではなく、自己の新たな可能性のうちに他者を受け入れていくのだとする。このことは、私たちが異文化を理解していく過程にも共通する見方を提供しているのではないだろうか。

②多文化保育における幼児の自発的な共生方略

東京学芸大学国際教育センター 榊原知美

【概要】

異なる文化的背景をもつ子ども、特に、共通の言語をもたない子どもと一緒に園生活を送るとき、子ども同士のやりとりにはどのような特徴がみられるのだろうか。

子どもは互いのことばを理解できなくても仲良く遊ぶことも多く、また日常生活に必要な第二言語での会話力についても、大人からみると驚くほどの速さで身につけていく。しかし、だからと言って、子どもがコミュニケーション上の配慮や工夫を全く行っていないわけではない。実際に異なる文化的背景をもつ子ども同士のやりとりを注意深くみてみると、子どもは子どもなりに、日常生活の中で様々な方略を駆使して異文化との共生を模索していることがわかる。

本発表では、多文化状況の保育における、そのような子どもの自発的な共生の試みと、それを促す保育者の援助のあり方について、日本語での保育を行っている中華系の保育所における保育活動の自然観察と保育者へのインタビューデータをもとに考えたい。より具体的には、日本文化への適応が前提とならない中華系の園において、来日直後の中国語児がどのように保育活動に参加していくのか、日本語児・バイリンガル児とのやりとりはどのようなものかに注目して検討する。さらに、保育者へのインタビューを通してみえてきた、子ども同士の自発的な共生行動を促す保育者の援助のあり方についても考察する。

③多文化保育における幼児のかかわりとことば

秋田大学 山名裕子

【概要】

私たちは生活の中で、知らず知らずのうちに様々なことを学んでいる。ことばもその一つである。岡本夏木(1995)は、具体的な文脈を手がかりに生活の中での相互的なやりとりを通して獲得していくことばを「一次的事ことば」、小学校以降に、読むこと、書くこと、みんなの前で発表することなどを通して獲得することばを「二次的事ことば」と定義し、「二次的事ことば」の獲得は「一次的事ことば」が基盤となることを指摘している。つまり、ことばは、話し方や文法、抽象的な概念を明示的に教えること以上に、生活の中でのかかわり、当然、何気ないおしゃべりも含まれるが、を通して具体的なイメージを基に獲得される。特に幼児期は生活経験が異なる子どもたちが共に生活をする中で、共通のことばが獲得されていく。

生活経験が異なるということは、子ども一人ひとりがもっている具体的なイメージも異なる。特に文化的背景が異なる子どもたちの場合、具体的なイメージも多様であるだろうし、もしかすると日本語を第一言語とする子どもとは違う側面もあるかもしれない。そこで文化的背景が異なる子どもたちの生活の観察場面から、かかわりの中でことばを共有することの難しさや、ことばだけではないかかわりの重要性を考えていく。そして、多文化保育だからこそ見えてくる課題から、「当たり前」を見直すとともに、幼児期特有の発達・保育についても議論したい。

④多文化保育特有の保育課題と保育者の支援のあり方

聖心女子専門学校 和田美香

【概要】

本研究では、多文化保育における保育課題や保育者の援助の在り方について、中華系認可保育所における職員会議と保育士へのインタビューデータをもとに検討する。先行研究では、保育者が抱える困難と問題点については、「言葉」と「食事」の問題が、上位に挙げられている(石川他・2007)(植田・1996)。

本研究では、このうち特に「言葉の問題」に注目し、保育者がこの問題にどう対処しているのかを分析した。その結果、担当する子どもの年齢や保育者自身の文化的背景によって、保育者の「支援のポイント」や問題に対する考え方に差異が見られることが明らかになった。

具体的には、4, 5 歳児の担任が子どもとの関わりの中で「通訳」の必要性を強く感じていることに対し、3 歳児の担任は「通訳」を、子どもとの関係よりもむしろ「保護者との会話」に求めている。子どもとの関係では、言葉での関わりよりも「スキンシップ」や「安心感」に支援の重点が置かれていた。これは乳児クラスで強調される「愛着関係」の構築を、この年齢で改めて行っているのではないかと考える。つまりそれは、言葉での関わり以前に、身近な特定の大人が、応答的、かつ積極的に働きかける配慮が必要であり、そこから「情緒的な絆」の形成をしていくことが保育の中心になるということである。このようなことに配慮する保育内容や保育形態などを考えると、多文化保育では、これまでの保育観にとらわれない、保育のあり方、考え方が必要とされていることが示唆された。